

メタファー表現の生産性に対する意味の焦点と表現メディアの影響 —〈急激な増加〉や〈大量の存在〉を表す表現の場合—

大石 亨 (明星大学情報学部)

Influence of Semantic Focus and Registers on the Productivity of Metaphorical Expressions –The Case of the Verbs Representing “Rapid Increase” or “Existence in Large Quantity”

Akira Oishi (Meisei University)

1. はじめに

以下の(1)から(5)の表現は、何らかの事物(嫌なものであることが多い)が急激に増加したり、その結果として大量に存在したりすることを表すメタファー表現である。

- (1) 人口が爆発する
- (2) 外来語が氾濫する
- (3) 拝金主義が蔓延する
- (4) 批判が噴出する
- (5) 赤字が膨れ上がる

ここで、(1)の「爆発」を「破裂」や「炸裂」に置き換えたり、(2)を「外来語で水浸しになる」などと言い換えたりすることはできない。このように、概念メタファー理論(Lakoff and Johnson 1980, 1999; Lakoff 1993)の予測に反して、メタファー表現の産出が保守的であり、使用語彙が制限されていることは「まだら問題」と呼ばれて研究者の注目を集めている(Grady 1997; Clausner & Croft 1997; 黒田 2005; 鍋島 2007, 2011; 松本 2007)。

松本(2007)は、語におけるメタファー的意味の実現に関して見られるギャップ(概念メタファーの不適用)に対する説明として、1) 目標領域における対応物の不在による写像の不成立、および、2) 語義的な経済性を求める傾向の二つを挙げている。前者は身体部位詞の物体部位詞への意味拡張に対して、後者は類義動詞におけるさまざまなメタファーの意味の実現に対する説明として与えられているものである。本稿は、類義動詞を考察対象とするので、2) 語義的な経済性を求める傾向が関わってくることになるが、これは、次のような制約としてまとめられている。

- (6) **語義的経済性の制約**：概念間の対応関係がある時、ある語がそれに基づくメタファー的意味を実現させることができるのは、より適切な語(過剰指定がより少ない表現)がなく、かつ、同じ意味を表すものとして他の語が定着していない場合のみである。(松本 2007, 82 ページ)

この制約は、一般的現象としてメタファー表現の保守性を捉えようとしたもので、その限りで異論はない。しかし、具体的な意味の過剰指定の内容や語の定着性の程度については、少数の用例のみに基づいて論じられており、その説明が正しいかどうか、実際の言語使用に基づいて検証する必要がある。そのために、本研究では、(1)から(5)のように、〈急激な増加〉や〈大量の存在〉を比喩的に表すいくつかの動詞を取り上げ、それらの類義動詞が大規模コーパスの中でメタファー表現として用いられている割合を、表現メディアごとに調査した。本稿における表現メディアとは、「日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」のサブコーパスのことである。また、調査対象語彙は表1のとおりである。

表 1 調査対象語彙と出現頻度

カテゴリー	調査対象語彙	出現頻度		MLR (M/L)
		リテラル (L)	メタファー (M)	
爆発系	爆破する	135	4	0.03
	破裂する	188	58	0.31
	爆発する	439	489	1.11
	炸裂する	71	80	1.13
氾濫系	冠水する	31	0	0.00
	浸水する	95	0	0.00
	溢れ出す	88	73	0.83
	溢れ出る	93	108	1.16
	氾濫する	79	144	1.82
繁殖系	繁殖する	300	10	0.03
	繁茂する	82	3	0.04
	増殖する	312	107	0.34
	蔓延る	21	174	8.29
	蔓延する	7	262	37.43
噴出系	噴火する	73	5	0.07
	沸騰する	537	64	0.12
	噴き出る	79	10	0.13
	噴き出す	502	106	0.21
	噴出する	172	145	0.84
	沸き上がる	14	117	8.36
	沸き起こる	10	249	24.90
膨張系	膨張する	223	113	0.51
	肥大する	67	43	0.64
	膨らむ	1074	819	0.76
	膨れ上がる	171	283	1.65
総計		4863	3466	0.71

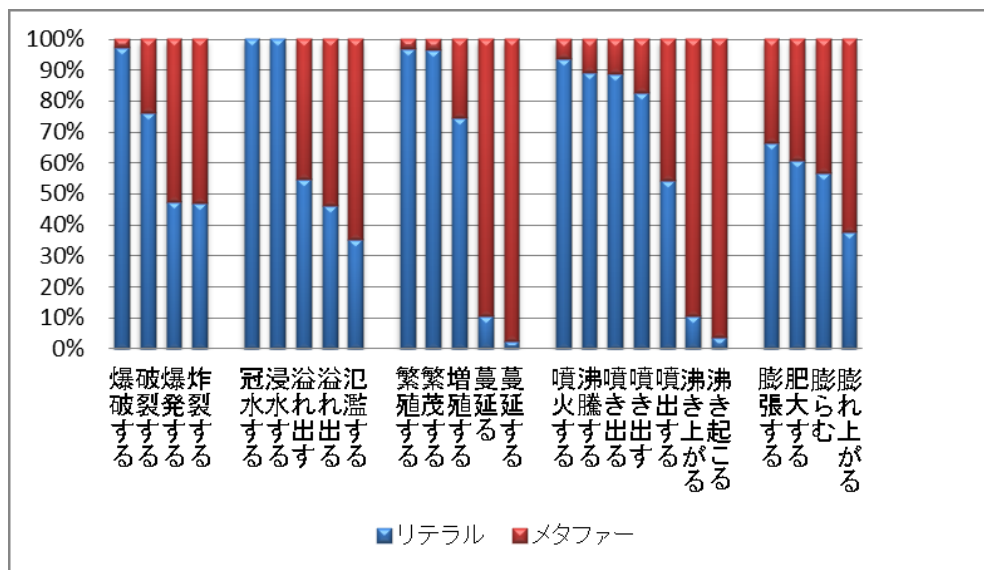


図 1 調査対象語彙のメタファー表現と字義的表現の出現比率

用例の抽出には BCCWJ 検索サイト「中納言」を用い、ダウンロードした検索結果を SortKWIC(田野村 2012)によって Excel に収めたものを、手作業によりメタファー表現と字義的な表現に分類した¹。表 1 の第 3 列が字義的な意味での出現頻度，第 4 列がメタファー表現としての出現頻度である。第 5 列は，メタファー表現の頻度の字義的な表現の頻度に対する割合(Metaphor/Literal Ratio: MLR)を表している。また，図 1 はこの比率を 100%積み上げ棒グラフで表したものである。図 1 から明らかなように，字義的には類似した事態を表すこれらの類義語には，メタファー表現の使用比率に極端なばらつきが見られる。以下では，このようなメタファー表現の生産性の違いが，メタファーによって置き換えられる対象が図地分化における図でなければならないという制約（メタファーの対象焦点化制約）および印象形成力や字義的用法の頻度など，複数の要因によってもたらされていることを論じる。さらに，調査の中で見出されたパターンに基づいて過去の研究事例を見直してみると，そこで与えられている意味の過剰指定の内容とは異なる説明が可能であることを示す。

2. メタファー表現の生産性

本節では，表 1 のカテゴリーごとに語彙のメタファー表現の生産性の違いを具体的にみるとともに，その原因を考察する。同時に，メタファー表現の出現する表現メディアにどのような偏りがあるかについても述べる。

2.1 爆発系語彙

爆発系では，「爆破する」<「破裂する」<「爆発する」<「炸裂する」の順にメタファー表現の比率が高くなっている。「爆破する」がメタファーとして用いられているのは，139 例中 4 例のみであり，「破裂する」のメタファー表現は 58 例あるが，「癩癩(玉)が破裂する」という固定表現(12 例)と，「心臓が破裂しそう」という誇張表現(8 例)など，定型表現が目立つ。一方，「爆発する」は，「怒り」や「不満」等，押さえつけられていた感情が一気に表出する状況を中心として，「人口」，「人気」，「打線」，「アフロヘア」等にも広く用いられており，「炸裂する」は，「パンチ」「拳」などの攻撃を中心に，「音響」や「叫び」，「親バカ」など，多様な語彙と共起している。

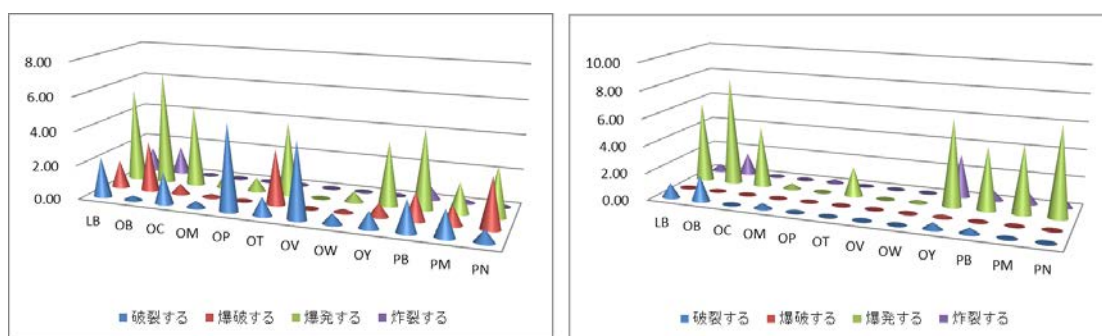


図 2 爆発系語彙の表現メディア別字義的表現(左)とメタファー表現(右)の調整頻度

図 2 に，表現メディア別の 100 万語あたりの調整頻度(PERMIL)を字義的な用法とメタファー用法に分けて示す。横軸の LB, OB 等は BCCWJ のサブコーパスにつけられた記号(表

¹ ある用例がメタファー表現であると認定する基準は，その用例で述べられている対象がモノであるかどうかによる。ここで，「モノ」とは五感のすべてに訴える対象を指す。水は目に見え，叩けば音がするし，触れることも味わい匂いを嗅ぐこともできるので，モノである。一方，光や音はモノではない。したがって，水の様態を表す語彙を光や音に用いればメタファー表現となる(大石 2006)。しかし，モノの爆発に伴って発する光や音に対して爆発系の語彙を用いる場合はメトニミーであり，モノの存在を前提とせず音の発生だけを表現するメタファー表現とは区別される。

2 参照) である。左側のグラフが表す字義的な用法では、「破裂する」「爆破する」「爆発する」は広い範囲の表現メディアで用いられているのに対し、右側のグラフが表すメタファー表現では「爆発する」のみが広く用いられ、「炸裂する」は Yahoo! ブログ(OY)で特徴的に(32 例)用いられていることがわかる。

字義的な用法を観察すると、「破裂する」は広報誌(OP)で「水道管」に多用されるのをはじめとして、薄い膜状のもので覆われている容器の破損を、「爆破する」は、教科書(OT)や新聞(PN)で、「ビル」や「列車」、「大岩」など、重量感を持つ大きな自然物や大規模な構築物について用いられている例が大多数を占めている。これらの、比喩的に使われることが少ない動詞は、爆発物が勢いよく外部に放出されることよりもむしろ、容器の損壊による機能の喪失や、原形の消滅による障害物の除去などを表す文で用いられている。一方、「爆発する」は、電球から超新星まで多様な物体と共起しており、爆発物そのものに焦点が当たっている。また、「炸裂する」は爆発に伴う強烈な音や光による感覚的なショックに焦点があり、相手に対するインパクトを表すメタファー表現として新しく用いられ始めた語彙といえよう。以上のように、メタファーによって表現される対象や知覚状況に焦点が当たっていない語彙は、メタファー表現に用いられにくいという制約を、本稿では「メタファーの対象焦点化制約」と呼ぶ。

2.2 氾濫系語彙

氾濫系では、「浸水する」と「冠水する」が、メタファー表現としてはまったく用いられていない。これらは、浸水の深さや水につかった対象の面積に焦点がある語彙であり、メタファーの対象となるべき水を図と考えたときに、地にあたるものに焦点を当てる語彙である。したがって、前節で述べた「爆破する」や「破裂する」と同様、「メタファーの対象焦点化制約」によって水がメタファーによる置き換えの対象となる表現として使用されることがブロックされる。これに対し、「溢れ出る」と「溢れ出す」は容器に対する水の動きの様態を表し、「氾濫する」は堤防という決められた枠を越えて横溢する水およびその影響に焦点がある。「溢れ出す」「溢れ出る」が「感情」や「気」、「思い」に対して用いられることが多いのに対し、「氾濫する」は「情報」「広告」「雑誌」「言葉」等に対して批判的な含意を伴って用いられる。水のメタファーが様態ごとに使用語彙の制限を受けることは、大石(2006)で詳述した。感情は水の湧出に、情報は広範囲な流通に焦点を当てる語彙を使用するのである。

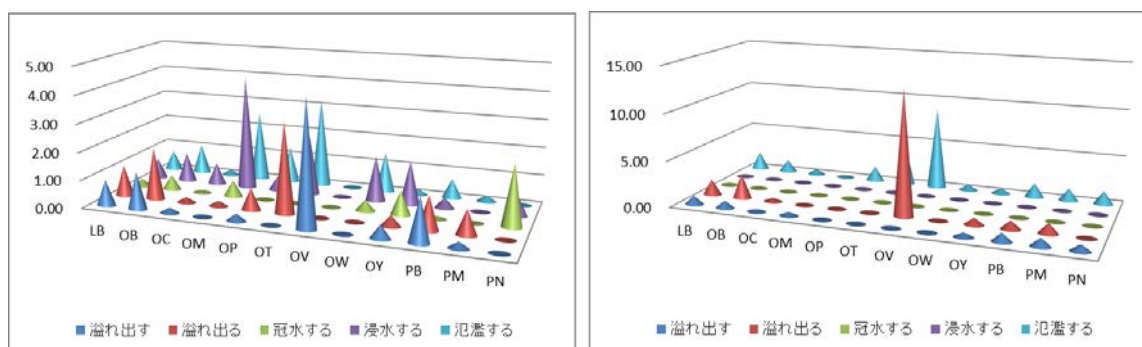


図3 氾濫系語彙の表現メディア別字義的表現(左)とメタファー表現(右)の調整頻度

図3は、表現メディアごとの出現状況である。ここでも、字義的には広い範囲のメディアに用いられている語彙が、メタファー表現では「氾濫する」以外は比較的限られたメディアでのみ用いられていることがわかる。グラフでは、韻文(OV)で「溢れ出る」と「氾濫する」が飛びぬけて用いられているように見えるが、粗頻度はそれぞれ3例と2例であり、韻文の総語数の少なさが調整頻度の値を突出させ、相対的に他のメディアの山が低く見えている(縦軸目盛に注意)。当然ながら、粗頻度では書籍(LB,PB)の値が高い。

2.3 繁殖系語彙

繁殖系では、比喩的に用いられることが非常に少ない「繁茂する」「繁殖する」に対して、「蔓延する」「蔓延る」の使用はほとんどメタファーであるという明確な対比が見られた。「増殖する」はその中間である。「繁茂」は植物に、「繁殖」は動物や細菌に用いられるという使い分けがあるが、いずれも旺盛な生命力を表現するのに対し、「蔓延する」や「蔓延る」には、病気や風潮が気づかないうちに広まってしまっているという否定的な含意が含まれている。植物の葉が茂るのは日当たりの良いところであるが、日陰では光を求めて蔓ばかりが伸びる。この明暗の違いが両者の評価的意味の根底にあり、そこに雑草の根絶し難さが伴って非常に強い嫌悪感をもたらす。この**印象形成力**がメタファー表現の使用を後押ししたものと考えられる。「増殖する」が抽象物に用いられるときも、コンピュータウイルスや不良債権など、否定的な含意を持つことが多い。このカテゴリーの語彙は、すべて対象の増加を図として取り上げるものであるから、メタファーの対象焦点化制約では説明できない。ここでは表現の持つ印象形成力が、メタファー表現の生産性に影響していると考えておく。

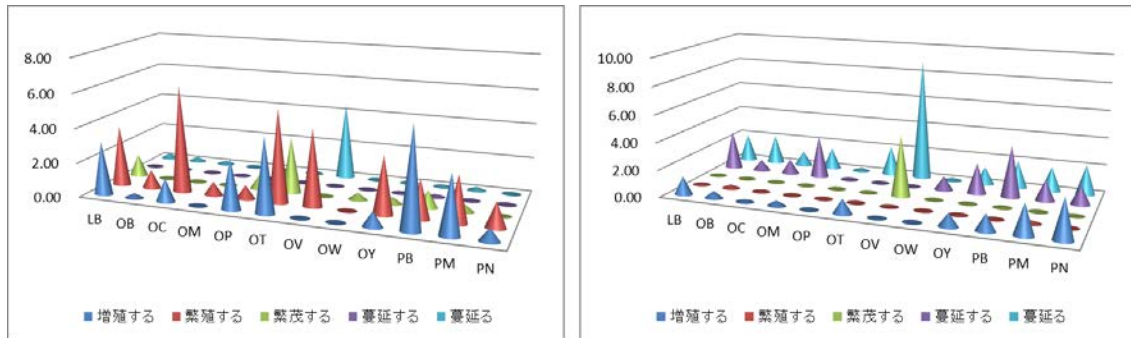


図4 繁殖系語彙の表現メディア別字義的表現(左)とメタファー表現(右)の調整頻度

図4は、表現メディア別の調整頻度であるが、ここでも、「繁殖する」・「繁茂する」と、「蔓延する」・「蔓延る」が、ちょうど左右のグラフで相補的に分布していることがわかる。また、韻文(OV)の粗頻度は、「蔓延る」のメタファー表現が2例、「繁茂する」のメタファー表現は1例のみであり、前節と同様割り引いて捉える必要がある。

2.4 噴出系語彙

噴出系では、「噴火する」が比喩的用法の割合が最も低い。「噴火する」の字義的用法における共起語のほとんどは火山であり、これは噴出物にとっては容器に対応するものである。したがって、メタファーの対象焦点化制約によって説明できる。

「沸騰する」は「議論」や「世論」に、「噴き出る」は「欲望」「いとしさ」などに、「噴き出す」は「感情」「怒り」「不満」などにそれぞれ用いられているが、「沸騰する」は「水」「お湯」と、「噴き出る」と「噴き出す」は「汗」や「血」と共起する字義的用法の頻度が非常に高いために、メタファー表現の比率は相対的に低くなっている。

これに対し、「噴出する」は「問題」「矛盾」「批判」「議論」「怒り」「不満」といった複数の領域に属する語彙の共起頻度が高く、「溶岩」や「火砕流」といった字義的用法の頻度と肩を並べる勢いである。さらに、「沸き上がる」「沸き起こる」は、どちらも「拍手」「声」「歓声」「どよめき」という音声や、「気持ち」「思い」「感情」「衝動」のような感情、「議論」「疑問」「批判」など、家族的類似性を持つ複数のカテゴリーのメタファー表現が圧倒的多数を占めており、主に「雲」と共起する字義的用法を凌駕している。このように、**字義的用法の頻度と、メタファー用法の多様性**はトレードオフの関係にある。

これは、言語によるコミュニケーションにおける二つの相矛盾する要求のせめぎあいによって説明することが可能である。メタファー表現をはじめとする創造的な表現を使用す

るといことは、常に聞き手が意味不明に陥るといった危険性をもたらすことになる。字義的な表現にあらたな抽象的な意味を付与することによって意味的な曖昧性が増えるからである。一方、曖昧さのない形でコミュニケーションを図ろうとすると、異なる意味には異なる表現を用いる必要があるとともに、表現の固定化をもたらすことになる。このように、表現の創造性と透明性には本来のトレードオフがあり、少数の形式で異なる意味を表す形式の節約原理と、異なる意味には異なる形式を用いるという単純原理の二つがせめぎあうことになる。メタファー表現を使うと創造性は上がるが透明性は減るので、慣用化やコロケーションの固定化と表現の使い分けによって透明性を確保する必要があるのである。「沸き上がる」や「沸き起こる」、「噴き出す」のように、字義的な用法が「雲」や「溶岩流」など狭い範囲に限定されており、使用頻度もそれほど高くなければ、その表現をメタファー表現に使用しても、曖昧性の出現する機会がそれほど増えることはない。逆に、「噴き出る」「噴き出す」のように字義的な用法の頻度が高ければ高いほど、意味が曖昧になる可能性もまた高まると考えられる。

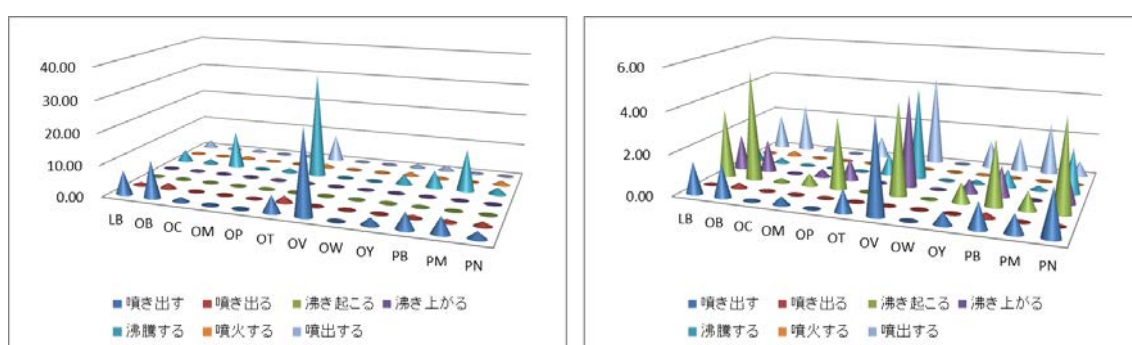


図5 噴出系語彙の表現メディア別字義的表現(左)とメタファー表現(右)の調整頻度

図5は、噴出系語彙の表現メディア別の調整頻度である。左側の字義的用法のグラフは、「沸騰する」が教科書(OT)で多用されており(31例)、韻文(OV)での「噴き出す」(6例)とともに PERMIL の値を突出させたために、全体的にフラットに見えてしまっているが、「噴き出す」「噴き出る」「沸騰する」の列が盛り上がっている。これに対し、右側のメタファー表現では、「沸き起こる」「沸き上がる」「噴出する」の列が立ち上がっていることがわかる。

2.5 膨張系語彙

膨張系語彙のメタファー表現では、「肥大する」が「幻想」「欲望」「自我」「自意識」など、比較的狭い範囲の想念に用いられているのに対し、「膨らむ」は、「夢」「希望」「期待」「イメージ」「想像」「妄想」など肯定的な想念と「借金」「赤字」「損失」「債務」など、否定的な意味を持つ経済的概念に用いられている。また、「膨れ上がる」は「人口」「数」「群衆」「規模」「額」など、一般的な数の増大を表すことが多いが、「膨らむ」と同様、「借金」「債務」「赤字」「損失」「支出」などの否定的な経済的概念にも用いられている。これに加えて、「怒り」「欲望」「不安」「恐怖」「感情」「思い」など、どちらかといえば負の意味を持つ感情にも用いられている。最後に、「膨張する」は「医療費」「経費」など経済的費用と「欲望」「感情」などの感情や「人口」「東京」などの都市の拡大に用いられている。このように、字義的には同じような意味を表す4つの語が、メタファー用法でも経済と感情、想念という同様の領域で用いられているが、評価的な意味と表現スタイルにおいて微妙に使い分けられている。

図6は、膨張系語彙の調整頻度を表現メディア別に示したものである。ここでは、「膨らむ」の使用頻度が非常に高いために、他の語彙の使用状況がわかりにくくなっている。目立つのは新聞(PN)と雑誌(PM)における「膨らむ」のメタファー用法であるが、「膨らむ」は字義的にもメタファー表現にも広い範囲で用いられており、もっとも基本的な和語基礎

語彙であることを物語っている。「膨張」「肥大」は漢語であり、「膨れ上がる」は複合語である。このような語種と語構成は、全体的な使用頻度に重大な影響を与えているが、メタファー表現の多様性という点では、大きな違いは見られない。むしろ、複合語である「膨れ上がる」がメタファー表現の使用比率が高い。英語においても、メタファー表現に句動詞が用いられることが多いことが Deignan (2005)によって指摘されているが、それと並行する現象といえる。これも、複合語によってメタファー使用の適用範囲を使い分けることによって、曖昧性を減じていると考えることができる。

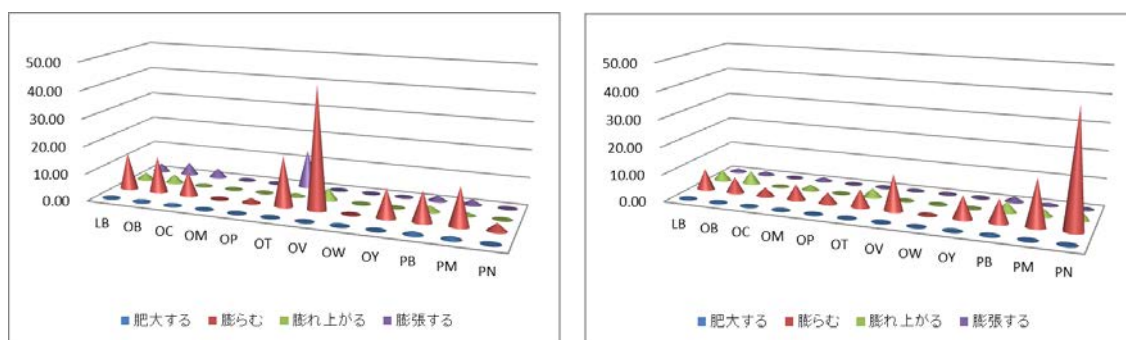


図6 膨張系語彙の表現メディア別字義的表現(左)とメタファー表現(右)の調整頻度

以上のように、類義語間のメタファー表現の生産性および多様性の違いは、語彙使用状況における焦点の違い、評価的な含意がもたらす印象形成力、字義的な用法の使用範囲と生起頻度など、複数の要因によってもたらされている状況が明らかになった。

3. 表現メディア別使用状況の集計

表2は、調査対象全語彙の表現メディアごとの粗頻度と100万語あたりの調整頻度(PER MIL)およびメタファー表現の字義的な表現に対する割合(Metaphor/Literal Ratio: MLR)を示したものである。表2によると、メタファー表現の調整頻度は新聞(74.44)と韻文(71.02)で高く、法律(0)と白書(3.69)で低い値となっている。しかし、各メディアに出現するメタファー表現のタイプはまったく異なっている。新聞や雑誌では、「夢が膨らむ」のような、トークン頻度の高い定型表現が多用されているのに対し、「女優魂が炸裂する」のような新規なメタファー表現は、小説やブログなど、私的な言説にトークン頻度は低いが、多様に、したがってタイプ頻度は高く出現している。後者は、いわば突然変異のように生まれ、ほとんどは淘汰されて消え去るものであろうが、まれに社会に受け入れられたものが慣用化し、前者のように広く用いられるようになると思われる。

また、国会会議録や新聞でメタファー・リテラル比(MLR)が1を超えており、メタファー表現が字義的表現より多く用いられていることを表している。これは、やや意外な印象を受けるが、全メタファー表現の出現頻度のうち約4分の1を占めている「膨らむ」が、これらのメディアでは経済的な場面で多く用いられていることが大きな原因である。逆に、MLRが低いのは、Yahoo!知恵袋(0.28)、教科書(0.20)と法律(0)であり、これらのメディアでは、字義的な現象を述べるのが、メタファー的な用法よりも多いことが、少なくとも本稿で取り上げた語彙については確認された。

4. 松本(2007)との違い

2.1節と2.2節で提示した「メタファーの対象焦点化制約」は、一見すると、第1節で述べた松本(2007)の意味の過剰指定の裏返しにすぎないと思われるかもしれない。しかし、具体例を考察することによって両者の違いを明確にすることができる。

松本(2007)では、(7)の例を挙げて、メタファーの適用における「漏れる」と「漏る」の違いを取り上げている(65ページ、例文番号は変更)。

表2 サブコーパス別出現状況

サブコーパス名(記号)	図書館・書籍(LB)	ベストセラー(OB)	Yahoo! 知恵袋(OC)	国会会議録(OM)	広報誌(OP)	教科書(OT)	韻文(OV)
総語数	30,377,866	3,742,261	10,256,877	5,102,469	3,755,161	928,448	225,273
粗頻度	メタファー	1257	166	131	86	45	21
	リテラル	1776	216	468	59	66	106
	MLR	0.71	0.77	0.28	1.46	0.68	0.20
調整頻度	メタファー	41.38	44.36	12.77	16.85	11.98	22.62
	リテラル	58.46	57.72	45.63	11.56	17.58	114.17
サブコーパス名(記号)	白書(OW)	Yahoo! ブログ(OY)	法律(OL)	出版・書籍(PB)	雑誌(PM)	新聞(PN)	計
総語数	4,882,812	10,194,143	1,079,146	28,552,283	4,444,492	1,370,233	104,911,464
粗頻度	メタファー	18	299	0	1145	180	102
	リテラル	32	343	0	1518	228	30
	MLR	0.56	0.87	0.00	0.75	0.79	3.40
調整頻度	メタファー	3.69	29.33	0.00	40.10	40.50	74.44
	リテラル	6.55	33.65	0.00	53.17	51.30	21.89

- (7) a. 水が {漏れる／漏る}。
 b. 秘密が {漏れる／*漏る}。

この違いに対する説明として、松本(2007)は、〈引力による下方向への移動〉という意味が、「漏る」に存在するために、それが過剰指定となって、「漏る」のメタファー的意味を阻止していると論じている。

『漏る』と『漏れる』において重要なのは、『漏る』が引力による下方向への流動体の移動(したたるような移動)に限られるのに対し、『漏れる』にはそのような限定がない、という点である。(中略)『漏る』に見られる〈引力による下方向への移動〉という側面は、流動体の漏出と情報の漏洩との間の対応関係には見られない要素である。この要素の存在ゆえに、『漏る』はこのメタファー的意味を持っていないのだ、ということである。」(松本(2007), 66 ページ)

しかし、コーパス中で、「漏る」という動詞が最も多く用いられているのは、「雨漏り」を表す状況である。「屋根が漏る」「天井が漏る」「この茶碗は漏る」という表現が象徴しているように、「漏る」という動詞が焦点を当てているのは、漏り出る水ではなく、容器にあたるものの瑕疵である²。たとえ「水が漏る」という表現がされている場合であっても、それは容器が使い物にならないことや、修理しなければならないという状況で用いられているのである。したがって、メタファーによって〈情報〉と置き換えられるべき「水」には二次的な注意しか与えられないために、「漏る」がこのメタファーには用いられないという「メタファーの対象焦点化制約」による自然な説明が可能である。

意味の過剰指定とは、メタファーには不要な意味が字義的な表現に含まれているということであるが、どのような字義的表現にもなんらかのメタファー表現とは異なる意味は含まれているはずである。「メタファーの対象焦点化制約」のほうは、焦点がずれているということであるから、説明の前提としてフレーム意味論的な意味の枠組みを想定している。

² この点については、松本(2007)にも、『尿が漏る』といえばおむつの問題であるのに対し、『尿が漏れる』の方は失尿の場合にも使える。」(85 ページ, 注 7)という指摘がある(下線は本稿著者による)。

その分、適用可能性は減ることになるが、過剰な意味の無制限な認定に歯止めをかけることができるという利点がある。

松本(2007)の語義的経済性の原則は、意味の過剰指定に加えて、他の語の定着性が別の語のメタファー表現を妨げることも述べている。この例としては、「食べる」と「食う」や、「だく」と「いだく」などの例が挙げられている。これらは、メタファー表現と字義的表現を語彙的に使い分けることであるから、2.4節で述べた創造性と透明性のトレードオフと同趣旨の説明であると考えられる。

しかし、その中でも定着性だけではなく、メタファーの対象焦点化制約によって、より自然に説明できるものが含まれている。それは、(8)に挙げる「歩く」と「歩む」の違いである。(79 ページ, 例文番号は変更)

- (8) a. 駅まで {歩く／*歩む}。
- b. 孤高の人生を {*歩く／歩む}。
- c. {学問／信仰}の道を {??歩く／歩む}。

この例は、二つの類義動詞間で、使い分けがよりはっきり分化している例として取り上げられているものである。ここでの説明は、次のようなものである。

「多くの話者にとって『歩む』は物理的な移動の意味を持たず、メタファー的意味のみを持つ。一方、『歩く』は物理的移動に使われ、メタファー的意味に解釈するのは難しい。(中略)『歩く』と『歩む』の間に、過剰指定の差があるとは考えられない。一番自然な説明は、メタファー専門の語として確立している『歩む』が、『歩く』のメタファー的意味の実現を阻止しているというものである。」(松本(2007), 79 ページ)

しかし、「歩く」と「歩む」の間に本当に意味の違いはないのだろうか。答えは、同論文の中に書かれている。松本(2007)は、「歩む」が死んだメタファーではないことを証明するために、「歩む」が「生きる」などと異なり、「一步一步」など、歩行の様態を表す副詞と自然に共起することを述べている。

- (9) 人生を一步一步踏みしめながら {歩んでいく／?生きていく}。
(松本(2007), 79 ページ, 例文番号は変更)

すなわち、「歩む」は移動全体ではなく、一步一步に焦点が当てられている語なのである。「人生を歩む」というメタファー表現が、抽象的な移動ではなく経験を一つ一つ重ねていくことを表すものであり、移動全体に対する一步一步が地と図の関係になっているとすれば、「一步一步」に焦点がある「歩む」がこのメタファーに用いられ、移動全体すなわち地に焦点がある「歩く」は用いられないことが、メタファーの対象焦点化制約によって自然に説明される。なお、『精選版 日本国語大辞典』(小学館, 2006)の「歩む」の語誌には「類義語『あるく』『ありく』が、足の動作にとどまらぬ移動全体を表すのに対し、『あゆむ』は、一步一步足を進めていく動作に焦点がある。」とあり、万葉集や源氏物語では字義的な意味の用例がある。また、「歩く」の語誌には、同様の説明に加えて、「『歩む』が目標を定めた確実な進行であるのに対し、『あるく』『ありく』は散漫で拡散的な移動を表す。」とあり、やはり万葉集の例が挙げられている。したがって、「歩む」が「歩く」のメタファー的意味の実現を阻止しているというよりは、それぞれの字義的な意味の持つ違いによって、よりふさわしい意味へと使い分けがなされてきたというほうがふさわしく、むしろ「歩む」が字義的に使われなくなったことが曖昧性を減じ透明性を高める役割を果たしたと考えられるべきであろう。

同じことは、「だく」と「いだく」、「食べる」と「食う」についても言える。『精選版 日

本国語大辞典』の「いだく」の語誌には、「(1)同意語の「むだく」「うだく」「いだく」「だく」の先後関係は、「むだく」が奈良時代から平安初期、「うだく」が平安初期から鎌倉時代頃、「いだく」が平安初期から現代、「だく」が平安中期から現代、という順になる。(2)ダクが①の意味(字義的な意味, 大石注)で勢力を拡大していくのに伴って, イダクは次第に③の意味(心の中にある考えや感情を持つこと=メタファー的意味, 大石注)に限定されるようになり, 現在に至る。」とあり, 「食う」の語誌には, 「(1)上代では口にくわえる意での用例が多く, 「食」の意にはハムが用いられた。(2)平安時代には, 和文脈にクフ, 漢文脈にクラフが用いられ, 待遇表現としてのタブ(後にダブルを経てタベル)も登場する。(3)室町時代には, クラフが軽卑語, クフが平常語となり, タブルも丁寧語としての用法から平常語に近づいて行った。」とある。いずれも古くから存在する語の字義的な意味が, 新しい語によって取って代われ, 古い語はメタファー的意味に特化する方向に変化してきたことを示している。この際, メタファー的意味が新しい表現によって担われないことで, メタファー表現の持つ本来的な曖昧性が抑えられ, 意味の透明性が増しているのである。認知的メタファー理論にも以上のような歴史的な視点を取り入れることで, より深い理解が得られるものと期待される。

文 献

- Bybee, Joan L. (2010) *Language, Usage and Cognition* Cambridge University Press.
- Clausner, T. C. & W. Croft (1997) "Productivity and schematicity in metaphors." *Cognitive Science* 21: pp.247-282.
- Deignan, A. (2005) *Metaphor and Corpus Linguistics* John Benjamins B. V. (渡辺秀樹, 大森文子, 加野まきみ, 小塚良孝訳(2010)『コーパスを活用した認知言語学』大修館書店)
- Grady, J. (1997) "THEORIES ARE BULDINGS revisited." *Cognitive Linguistics* 8: pp.267-290.
- Lakoff, G. (1993) "The contemporary theory of metaphor." In Andrew Ortony, ed., *Metaphor and Thought*, 2nd ed., pp. 202-251. Cambridge University Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press. (渡部昇一, 楠瀬淳三, 下谷和幸訳 (1986) 『レトリックと人生』大修館書店)
- Lakoff, George and Mark Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*, Basic Books. (計見一雄訳 (2004) 『肉中の哲学: 肉体を具有したマインドが西洋の思考に挑戦する』哲学書房)
- 黒田航(2005)「概念メタファーの体系性, 生産性はどの程度か: 被害の発生に関係するメタファー成立基盤の記述を通じて」, 日本語学, 24(6), pp.38-57, 明治書院.
- 国立国語研究所(2011)「現代日本語書き言葉均衡コーパス」利用の手引き 第1.0版」, 大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国立国語研究所 コーパス開発センター.
- 田野村忠温(2012)「「少納言」「中納言」検索結果活用ツール」, 第1回コーパス日本語学ワークショップ予稿集, pp.9-11.
- 鍋島弘治朗(2007)「黒田の疑問に答える--認知言語学からの回答」, 日本語学 26(3), pp.54-71, 明治書院.
- 鍋島弘治朗(2011)『日本語のメタファー』, くろしお出版.
- 大石亨(2006)「「水のメタファー」再考—コーパスを用いた概念メタファー分析の試み—」, 日本認知言語学会論文集第6巻(JCLA 6), pp.277-287.
- 松本曜(2007)「語におけるメタファー的意味の実現とその制約」, 山梨正明他編, 『認知言語学論考』, No.6, pp.49-93, ひつじ書房.

関連 URL

コーパス検索アプリケーション「中納言」 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/login>